



頭書
繪註

庭訓往來講釋

下



聚沙門



御令新之國傳



所法王会書



聚沙門
新之國傳
御令新之國傳



心念申入候不為之外延延

加傍案取定心之間微力之

不及依之取定本為不碍寸

唯也持取状候自由之云云

以沙常用之在法中取物來

延川講狀

六二七

斗数行人



掬



登



教



俗人蘇



世日以勝負経美山お風流で

入之物也 不意やふとふかの人々の弁ある

捕と怒を借て費ふ者といふ事 精員好美はゆも

紅系平楊裏袴红梅之筋小

袖隔子織物紫衣流紅袴美

精好裳唐綾狂文唐衣朽葉

比美冠袖赤黄流文流指経

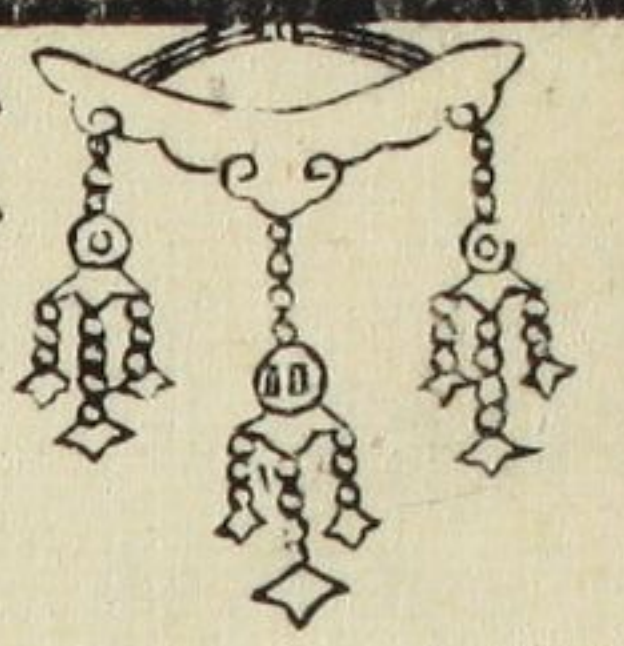
虫目結巻深村緋袴清美小

袖口懸帯 赤紫をよとよ赤く下白 楊

裏に表に黄をよとよと裏のまをよ

衣指之 刺目あどのれ 隔子織物に表の目に織なり

表に表に紅をよと裏に白 美精好裳はうつくしき精好



璫鈴



白拂

法標



花

花



花

花



花



紗平絹木とて製す作並舞の如くうへに細細敷あり

▲並衣、襟ありて袖小似り深色の深淺地紋の縁ありて

袖少を分つ又別よ小直衣とあり紋を大括括敷此

袖小指と菊の▲袴衣、紋色定り形布衣小似り公卿

舞袴ありと小必忌用以▲馬袴五人堂四七代武氏天皇の

以て製する▲並舞、衣長袖又似て菊結あり縁細敷

裾より小裾をまされと忌以▲大口の重七袴の文帯より

とど白縁をて作る今縁の袴に用りりのは乞く▲又唄五人官

袴の下若玉袴汗よりく▲腰刀、細刀之刺刀ありとあり

袴の縁は、白月の返状なる▲大星の袴、毛はる上袴備

仍小縁と袴をて而香を添ぐの夏衣小大甲とてゆへ

は、より作らるるを指して毛色の白星とありて裏に

お綾薄油木袴、首蒲皮と用ひ夏草ハ暗指とぞ▲天

ハ大縁を下げ作らるるは、六月の返状小流す▲年約を六

文意

飛車と戦する半の

物敷くわりとよおあるとて中

の委りり中一たまの道とあり

七月六日

左衛門尉大守

宮内少輔殿

▲宮内少輔は補任後下に於ては左大臣の字に於ては
 左大臣の字に於ては左大臣の字に於ては左大臣の字に於ては
 左大臣の字に於ては左大臣の字に於ては左大臣の字に於ては
 左大臣の字に於ては左大臣の字に於ては左大臣の字に於ては

白紙拂座之石取利及板也

文非神祇之儀押幣用物

子任目録不被下之由用獨

後者意之持物也

衣文要用を考るる合の之間

練色魚就名張裏衣之平儀

浪文之打席使者社中人之長

初素消装束好為墨衣法

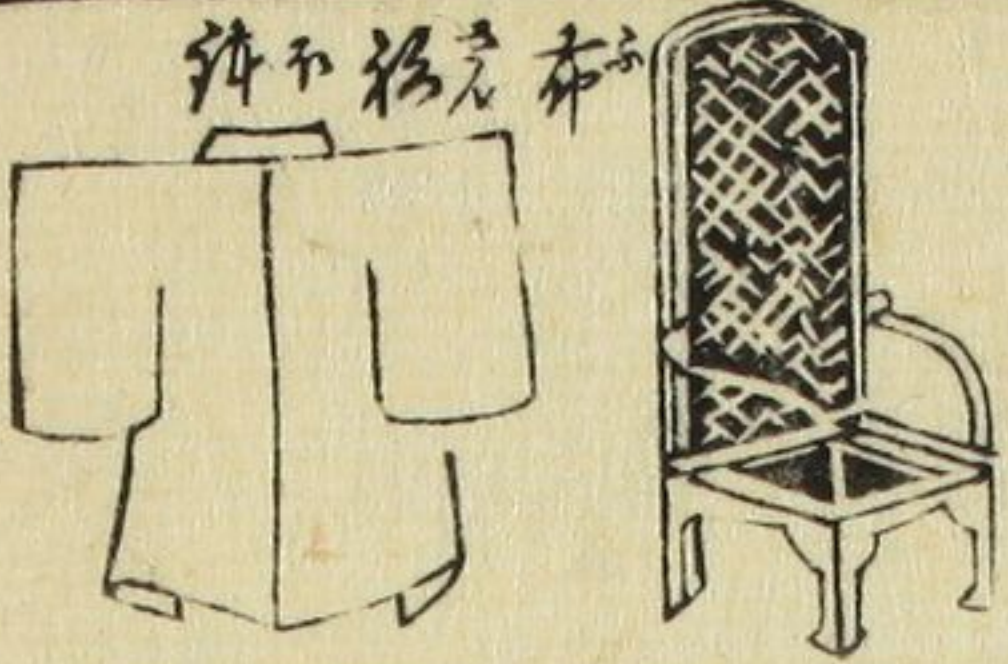
初素消装束好為墨衣法



結文



花鏡
御簾
御中



御座
御中



御座
御中
御座
御中

好でござと吹しといふ▲古教よりハ楽器の物と指し候
文に是と載しつゝもさへ八尺前後三尺とありの是と▲新

教よりハ於我の楽器也といてこれ懸つ今借儀教とも亦
箱教といふ儀也▲狐教ハ古の楽器今教今降古宗

に用ゝ狐教といふ儀也▲二教ハ世教と指しそのつゝ
も名教ハ古の楽器を新おき教と二ツ違へる事にて指し

如きことなるもの今小町の舞具もふりくち教といふもの
形も似て候と見し之▲羽教ハ古の楽器なり出づ候教也

教と以て作り置中に華也と見し二教懸合しと見る事
教ハ▲羽教ハ古の楽器今知る者も一人も早六代

孝儀天皇の御宇に始りたりと
▲不日ハ日とのをさざとといふ事と
文 料紙されし事
及古く懸むにて

将儀ハハ巾着の儀も亦ハ目録の事なり下り候事
りる事ハ用ひ候へり候事ハ物事にて置されし候事

昨夜の夜帳中候事ハ亦ハ差入候事由多候事ハ
下と懸し置文の亦あり候事ハ使事ハ中候事

候事ハ不日ハ物事せしれ候事ハ物事
生涯の不覚なる事候事ハと云ふ事

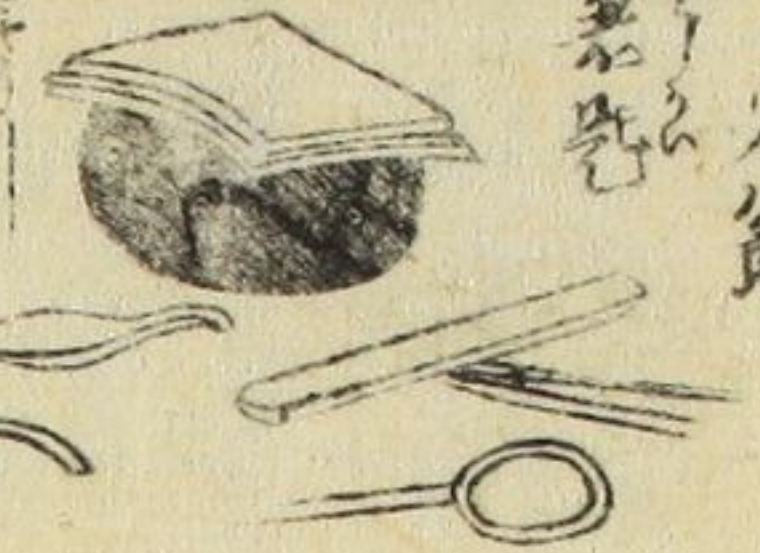
七月日

紀

海上大義函殿

▲大義函大御あり六段の儀これハ御事
中といふ▲紀氏ハ伊勢儀事より四世神宮考事

火筋

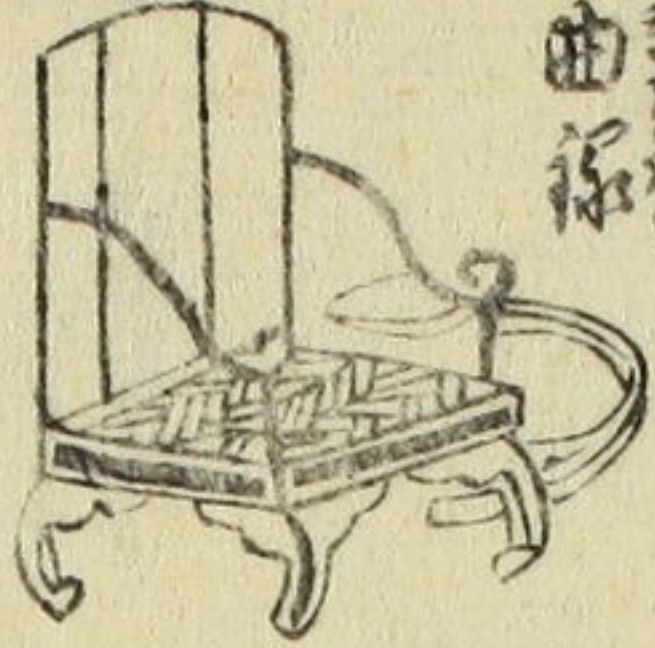


香



袴衣

曲



注被



室孫を始とする也

下意以後人不得素肉之條

始如忘性日苦熱非拘中

寫宗只自然之悔意也及彼

折洛陽靜澄固全在素色

本年中也君身快樂可被素色

下意初より田舎へ入りて居りての一日

▲若君は先考の條切多き情とのみ▲洛陽へ入りて居りての一日

右系と長安と居りての一日

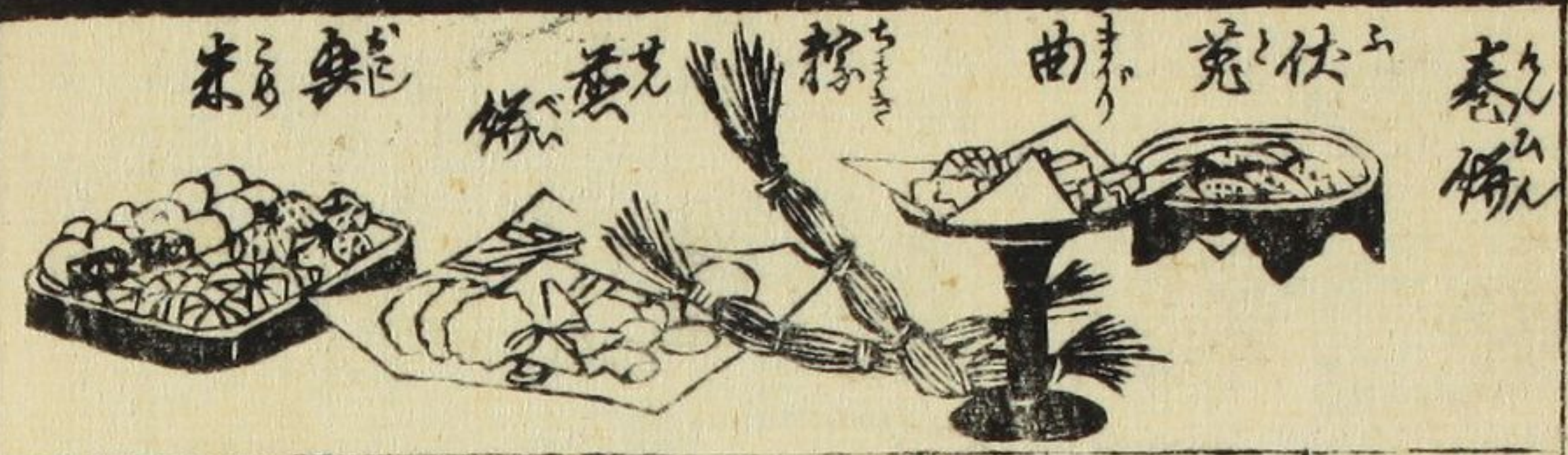
就之乎引付也

法定被以山次不須安法定

至痛紙坑遠乱之際欲致身

得之處以同被考所領任條

疑合均山獲考考法以被持之系



代友也極其未練之仁令替

古之禮名其加少詞之越友也

本於其書与州案去代其

守奉以而志心悅以

例之以此今之例之小令其法す之

法の強弱を合すべし

之の強弱を合すべし

之の強弱を合すべし

所上裁勘判之辨書人議定

之經辨定元法下

沙法之法所替之規式雜務

之流例中知成取債例約法



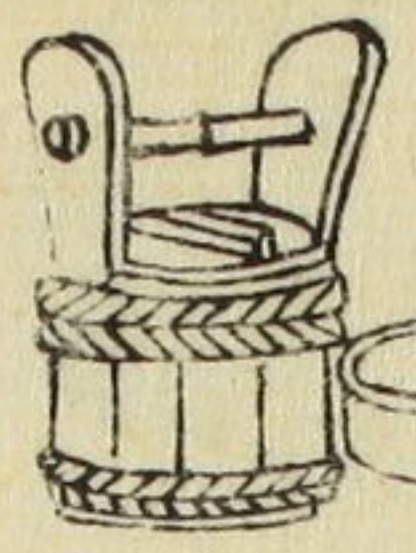
鉢入名ハ



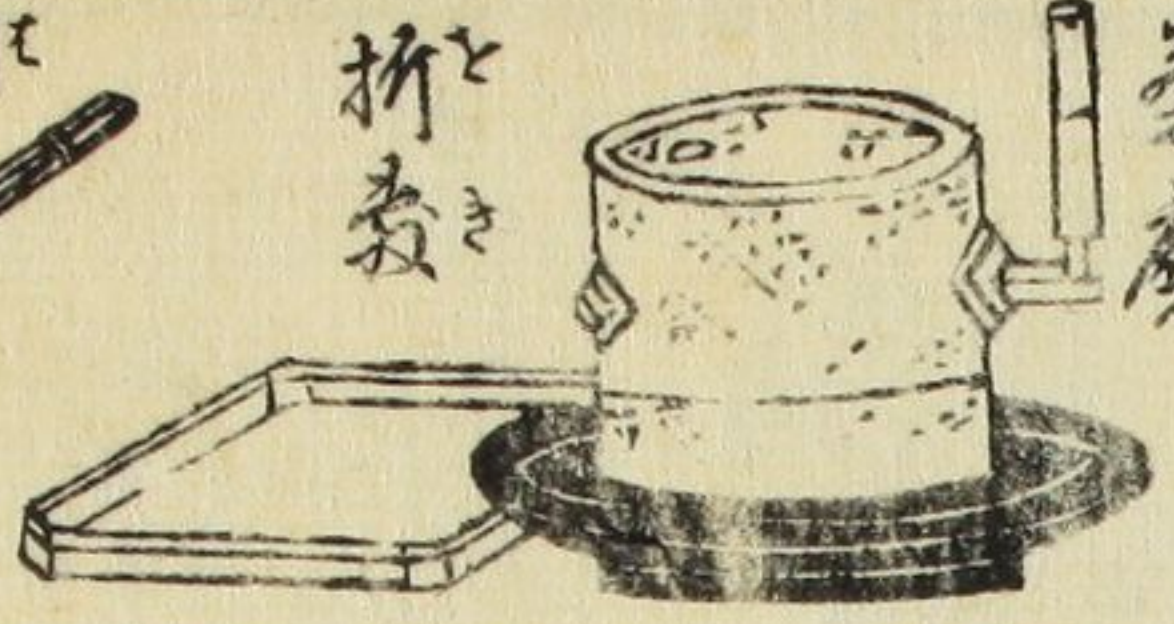
茶



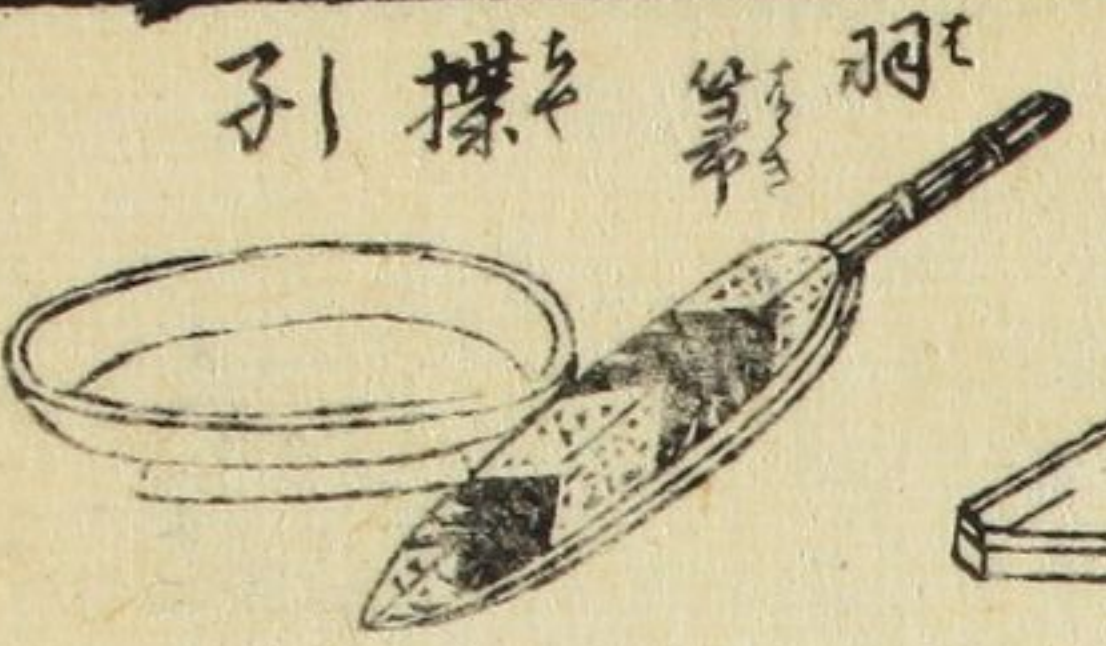
茶



茶



折



子

律令或家お達存私仕及作

▲同治雨ハと奉と獲く彼雨之 ▲上裁ハ上の法裁律之上ハ

▲先相と判つとのハ ▲重ハ公外と判くハ律定元打トウ

▲法ハ更すとのハ ▲律定元以下とのハ公外後後人の作

▲規式ハ規非法式之例格とのハ ▲執勢ハ何れハ規難との

▲遠ハ公家の律令と武家の律令との差ハ何とのハ

▲借法古日記法例ハ何れハ加一見

▲於不審ハ人のトトハ

▲小治政ハ何れハ雜抄ハ何れハ

▲或管官人ハ何れハ

▲或管官人ハ何れハ



城が山をみる由法の筆丸をえりてせき所へ
引守して終つて心悦ゆりて酒法亦の二件法後乃
空例法ホと云ふ一まう一紋中の類公家武家の
のホ覚快つて一皮一腹き学問るれど勉めて終る古の
一法一古れに録ホと云ふ一ものれり申して一書き一
間と云え侍一人免ても古きもの情くつて一類
るに及むも一毎つて一もの
あるす一初つて一あり

八月廿日 加賀大掾和氣

氏部大掾

▲氏部大掾ハ正六位下にて加賀守を兼ねて氏部大掾と云ふ
▲加賀大掾ハ後七位上にて加賀守と云ふ
▲和氣の姓ハ當仁天皇
十六代の孫大納言
福正の孫法隆に始り

依止指事為市通津略之

至終天位と云ふ昔同條松

平三日本古中忍以満是之

危度森何り必之代は海泰





平一天靜溢日人々攘夷也

幸祐也沙法事嚴甚而彼

執行也又非停洋餘儀之政

道所法若有德之後息之候

志也也洛之費也

平靜溢日不安くまづさうく

らうとわむ安穩あるのま

幸祐のま幸祐に愾る大極

後より加實大極なる所の

中古の軍系初に在るま

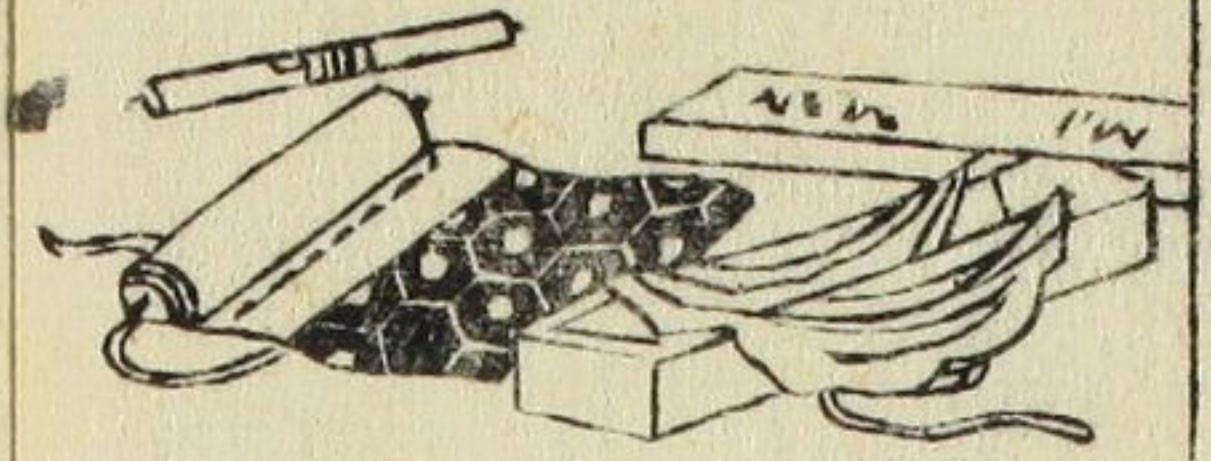
後利言活轉之計略

先之進舉状於代官等之所

讓狀



書



書



書



言

八十三

俗に極子密辨との云の亦不用い來せり▲讓狀條
實人のまを認るど讓りて争ふると此後代人の執柄ある
者然んてあふ世を以て他人の是と係りて然成
形す條判らざるの執りて然成の形定めののれと
いふ▲誠境お備のものを伏せりぬ▲甲乙此分ハ此非乃
有る之▲條代お備の六月のを伏せりぬ▲系引をハ系代

の之物あり▲引付ハ
此乃を伏せりぬ
凡人上流圖圖者

等奉行人等為終日沙評定

改め若新方更々清は体息は幼

判之物同江兩紙
判之

虫與同状を書於将人之時

及あな及名者他使部社下石

符就遺書散状者並被下加

子新人会百進之時者被去

下所状者之同之答新陳於

三川傳記

八二日



非の巻の権雄



文の権



次を

主君と知君とのつひのくく凡そ所人とおひ方と
 手に同君の云紫とあまのつひ陳八おひ方の云はるり
 ▲對文は所人とおひ方とをいへて同君とせよ云紫乃
 野正はよして理法と交ひするといふ▲雄權は能く公の
 務負とのつ権と先ハ務方雄と能く自方之▲云はるり云
 と、おの同君の時あるのつひ口をを撰かるく▲是のん成候は
 におのを
 状あるゆ
 同江所志永代作券安

法奉記故券奴婢雜人券契

和興状自思能文号謀實記

明之管領家人有券券以人

与洋判也奉行人の云々券方

之興券為来仁も成事上下

國之時下奉書而序るる

時下使節自文調所陳状相

對通而執事多々管領券以



人等可致問答披露沙汰然

探頻之責見所加下知也

屋敷など責候一の控文との一安法年記披露すして

貨物おの控文との一安法年記披露すして

その中へそ元の安法との一安法年記披露すして

かつめ奴婢雜人券契ハ奴隷婢女ると下人せら抱ゆる

控文之和興状ハ和興の各書せ控文之貞田ハ古く徳の

控文之と保実公案にも後於赤人ハ執りの下司之執

りハ六月の返状あるの判判ハ子の條と備して是飛紙

判の之と保實公案にも後於赤人ハ執りの下司之執

あると奪ハる候代りの義▲尚赤仁ハ傳出者考と

のハ下國のおまの若國元江下り居るといふ▲出下を去た

お問状のり之▲無事侵長所除未以下の後皆ありんか

▲探頻ハ海倉御軍久の親王の時永仁と云法馬中必の探

侍不

志謀叛殺害山海も械法新

二盜放火刃傷打擲蹂躪勾

引路次狼藉闕律喧嘩等也



孫殺



殺害



被

後從執事等の人指し置所

目代後新状於右筆之時以

小舎人或下初等百出犯人

古傳所記録中同後之新

種類分明犯否之時所犯已

名は通志初に録之或及推

問拷問拷問亦為搜之身究

与同業類未了断死若此殊

之可被者控獄之可流刑志

被記海懐芥火中追放中

陸軍将軍其人乞罪之為

▲係殺ハ六月のを被ハハ西家ト乱さんとする者ハ殺
害ハ人と殺す者▲山海、被滅法籍、二盗ハ六月のを被ハ

八月七日 氏初吉 捕田系

後上 大掾 及

田系又藏冠後之公六代の孫後六代下河内守村郡の長男後四位下武藏守鑑也府内掾兼以世小使者也と稱し是も祖之見牙子孫は田系と稱し

去比禰沙札惟之妻他行之

留幻不中も返車山之際失

本意兼物行軍が美多新系

海之奉供事日記は借用威

方以後日慈之を之を新始之

顔之園東勢也八捕系系

山系

△お軍家へは利を移し金町の御年より△美多八捕之は法が八捕之と稱し△法を日記に記すは代々の為辨列おの記録△園東八月のを状に之を後と、権舎と稱す△法を八捕之にお別権舎ありと稱す



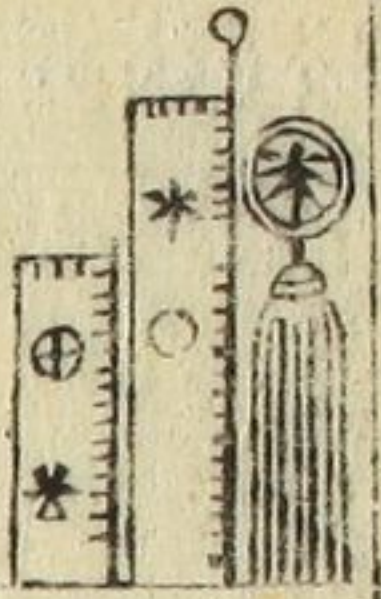
新供



將軍



田系 後吉



この勅使に侍りて参りて
路次志入業御車
神石清和と同し

後車公卿一人務る殿上人前

強小南木美々教務行羅天陣

改教礼符夜水界供奉人海

夜名正重布夜京勢夜文撥

道行松橋目都又道京末色

粗文名色首務金根凡をよ

中間雜文舎人半知末折付交

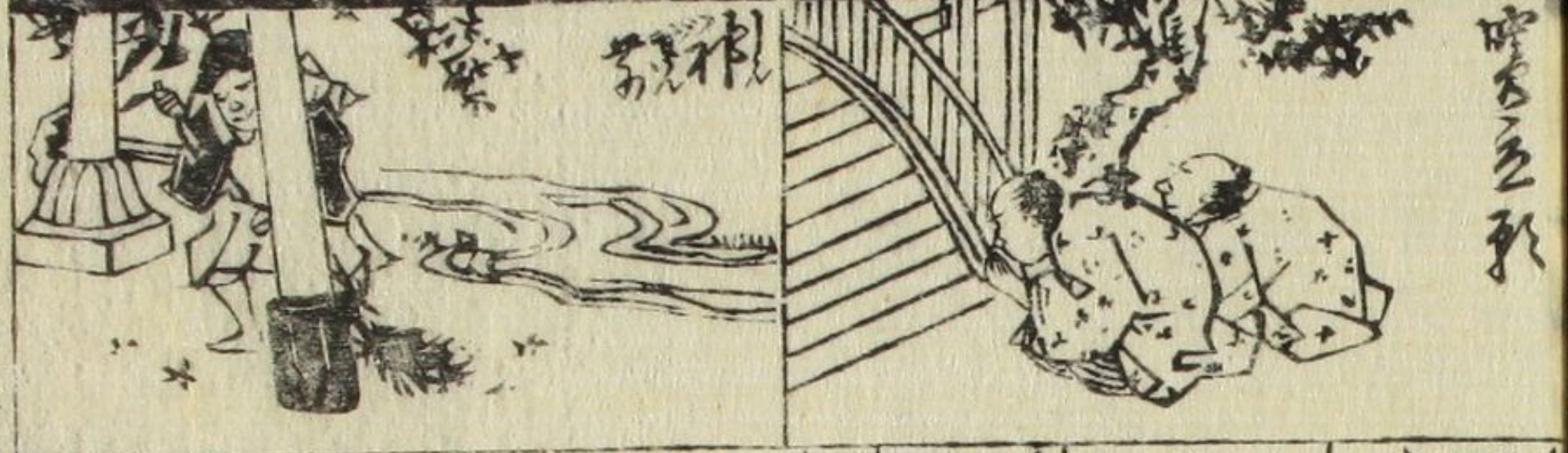
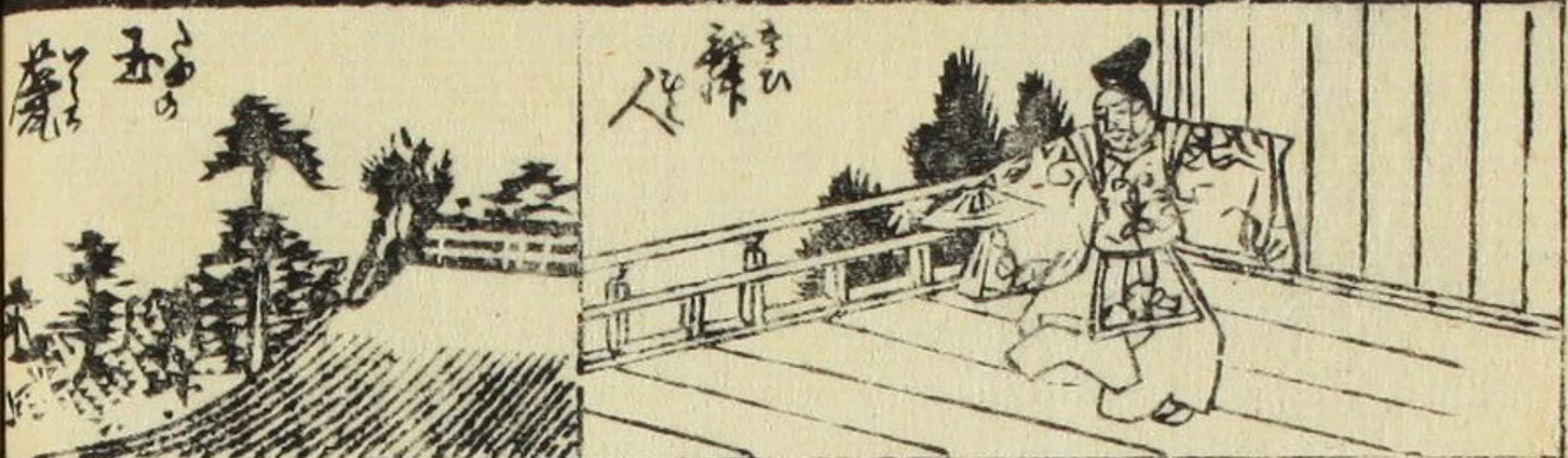
色

先拂の侍之伴

ののつれむ

此れを





流とつゝとあるんと関本つゝとあると
おや即修人の装束とつか
舞人の修人の舞
舞人の修人の舞

舞人の修人の舞
舞人の修人の舞
舞人の修人の舞

舞人の修人の舞
舞人の修人の舞
舞人の修人の舞

舞人の修人の舞
舞人の修人の舞
舞人の修人の舞

舞人の修人の舞
舞人の修人の舞
舞人の修人の舞

舞人の修人の舞
舞人の修人の舞
舞人の修人の舞

舞人の修人の舞
舞人の修人の舞
舞人の修人の舞

舞人の修人の舞
舞人の修人の舞
舞人の修人の舞

舞人の修人の舞
舞人の修人の舞
舞人の修人の舞

舞人の修人の舞
舞人の修人の舞
舞人の修人の舞

舞人の修人の舞
舞人の修人の舞
舞人の修人の舞

舞人の修人の舞
舞人の修人の舞
舞人の修人の舞

舞人の修人の舞
舞人の修人の舞
舞人の修人の舞



獨り寫すべからざるも別て明白なる後あり

意文 去次所状多し折弁ありて後中より後中より後中より

の日記所一借し重なる由後日貸来しせんを越へ

の借據とす借書の人と其巨く由る系勢はくくりま

に尾原社所より人舞楽と借り神祇の事抄あり

中を秘曲とすといひていさあやう神中記に記さるる

かうに八咫とくうに

八月十日 教後長巻記

僅上 大内記殿

大内記におよぶ正六位上近代五位上名は下記を

とす

あつても教後の人へ



法後之徒者其系徒言

上之名者其系徒公私意

劇之悔意之條紙及之玉骨

佛之真意後悔之非是地也

抑近日執以佛事大法念の

作持法事者其老當中當目

喝奪師方其被日具侍者能

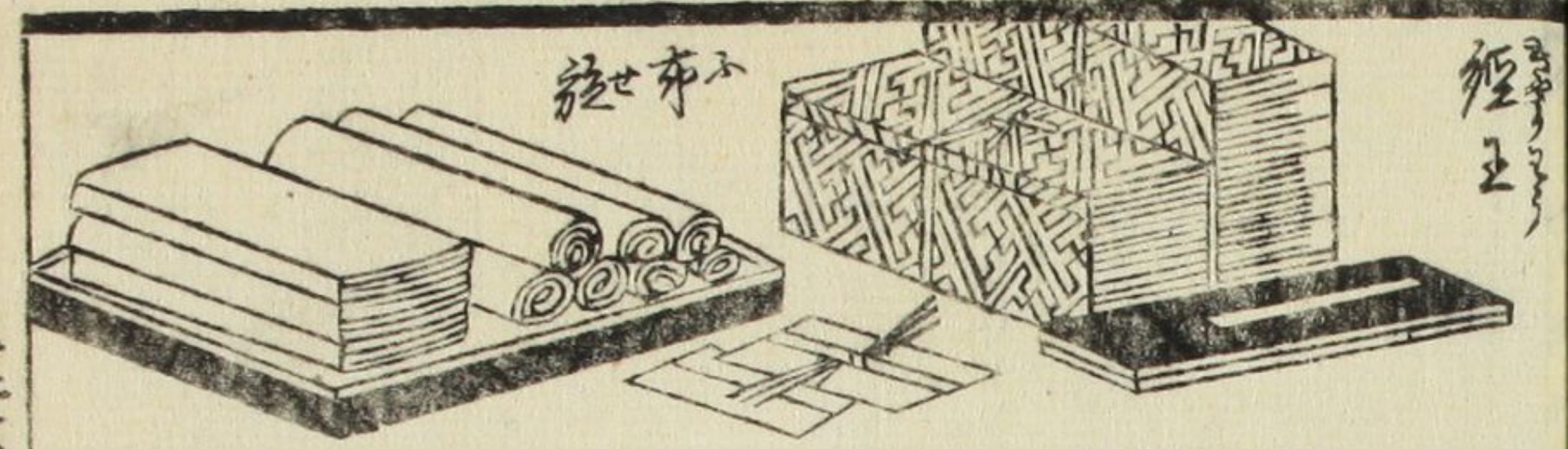
叫法密改首許光院山を進

力者其興下以

法後之徒者其系徒言

上之名者其系徒公私意

劇之悔意之條紙及之玉骨



此の巻は中して經文と唱へたりは氣僧と等き候ふ
後之は經の抄録の段のありたる者之利ある候ふ
用ひ承る候僧之又行若とて又あり各十月の
▲種研ハ和名の小菊を勸る小童之▲精家ハ
後之は經の抄録の内より毎常以▲正首ハ
僧といふ▲カ若ハ乃々持の教とありん▲
可省漢供會條々老精念字

重塔安金書室塔經義釋

抄會書体所藝門一階湯屋

僧坊令交寫身如來白標住

像美後協士二天村彫之細

金彩色法像各一幅為漢書

画一對書寫抄寫法經持後

殺若續補經王勅行秘法唱

滿泥經卷名補夫云攝定念

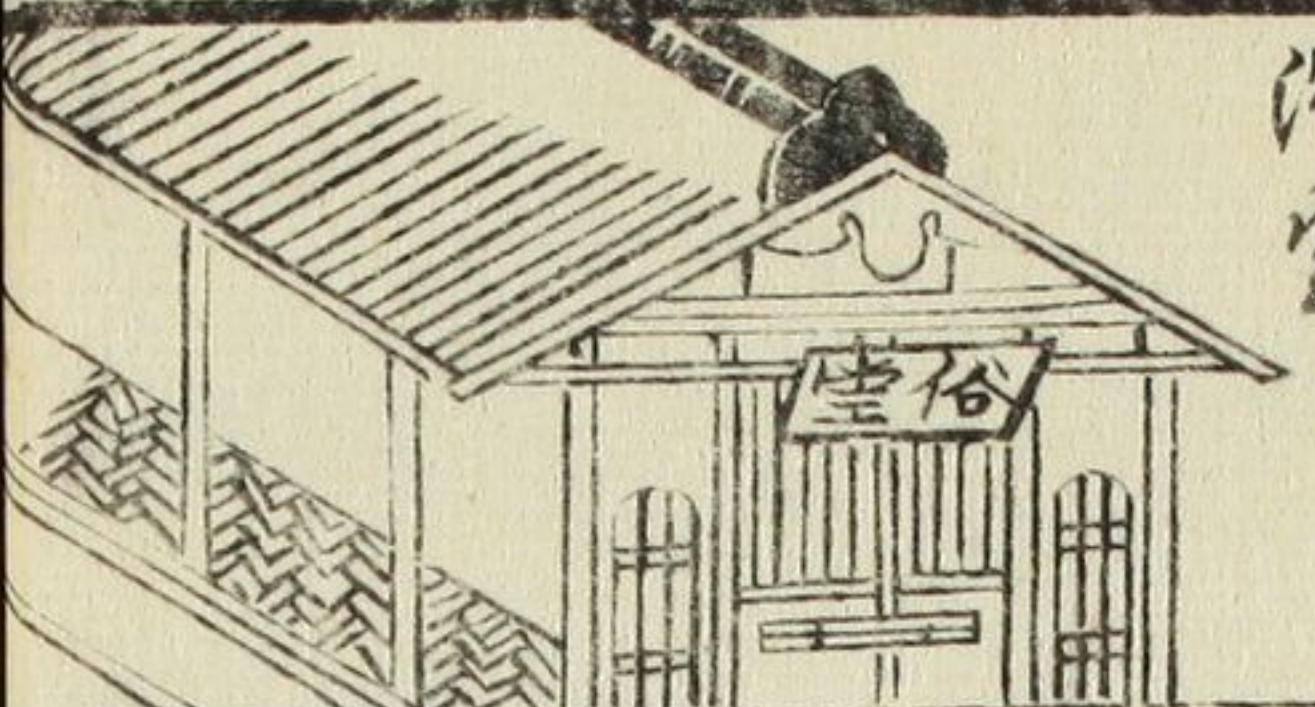
玉川清久

九十九

三階塔



浴室



粧舎一字



佛九旬位元一夏持師律

掛撤行人未持師律

非人施の事也

とつゝ▲粧舎一字の奉一初之▲之奉之塔婆之塔の塔

利るをと納む一又多室塔より佛▲純新一切經を飛

る座▲鏡拂の鏡つれ事之▲舎中六階元の舎よりす

不▲休不の勤仍休息の亦▲熱門二階ハ二階作りの又つ

舎之▲舎を色給ふ如來の如もれも舎に舎を色給ふ如

像とつゝ▲白檀生像美薩ハ白檀を刻して造る世

まふ本像之美薩ハ美薩の塔と略せ之▲筋之たた

の筋とつゝ二天の章法天毘沙門天とつゝ▲射形はま

刻之低るとつゝ▲細令彩色は後像若一幅ハ公鹿が式と

彩色がたの掛物すと二油之▲落濃墨画一對とを只

墨画の二幅射とつゝ▲出窓の障かき本欄窓の障は板

三川精尺

二

今更なる白檀
仏像



善法の
一對

教
師



唱
師



原言

之梵經のまゝ唱よ
稀名を仏陀の名号とせし
稀なる之
九旬供花白八十見
又四月十六日より七月

十六日まて九十日と指し又
一友と名くを留花城
供する之是と云むと指し
一友指すハ一友九十日

の白麻と指して不潔
ふれざるを信不友
も亦是之友と修する
日本より人會丹
我推古天皇

十四年初て四月八日より七月十六日まて
是を指し
稀律ハ四月のを決する
掛撒ハ世より終に

ありの義その約人と
樹下の上には身と
して難行若
と修する人との
掛指ハ
能物と指して
性乘の人と修する

の義あり
子僧ハ
人の信流
飛人能
但佛

布施并被物雜物等用之經

性也其擡涉助成之被執巧之

隨飛涉讚嘆之儀以信告白修

可也唱一誓也而信法長情

忘情教白
此布能ハ
信外に布く能物
被

信流ハ
引物
經後
うろく
信後
飛嘆ハ
經の
終

延川講天

百一

龍僧



侍者

九月



新

房言言集

と六打あひ物と一教負
うやまうてまうはと刑は

文意

五流法にあひしより
多ありて中なるんと思ふ

公私の名利を捨てて
叶ふと願むをうりたり
に世帯の長老とあひ
と信具られ光陰汗い

るべき條に精舎堂塔
像經史未開眼の信
次小僧遠く若人旅

の利をまへと願は
あられし法義深奥
と思ふ一藝とちる

九月十日

沙弥

進上侍者中

▲侍者の進上
▲海師の十月の

秀れと名を授けん
沙弥に名を授けん

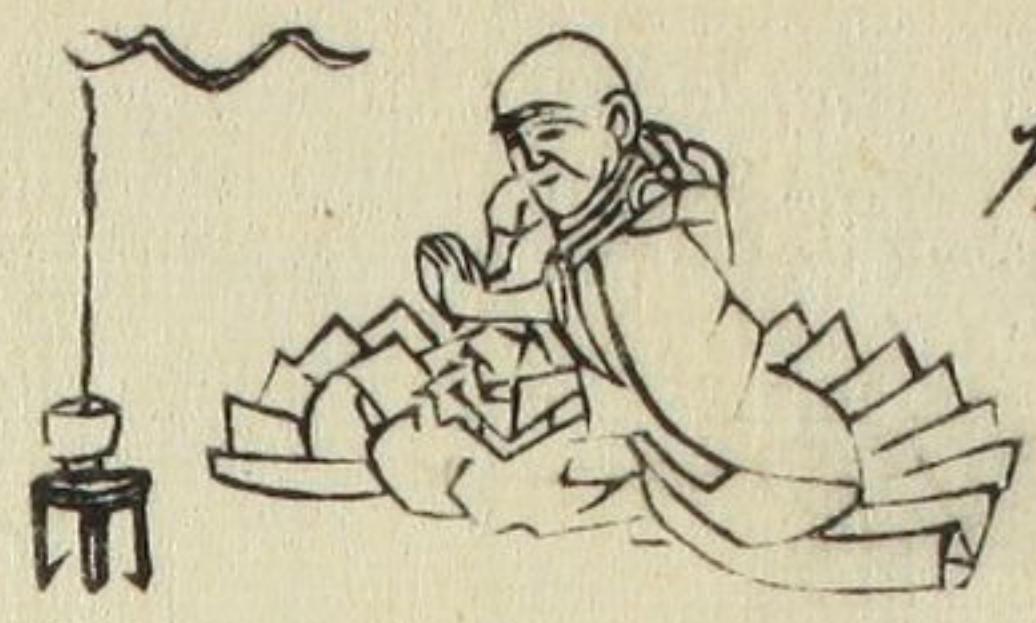
悔意を條凡情常業

悔意を條凡情常業

延川集

二

大
乃



深
也



咽
咽



呪
呪



て世謝る也唱守事の中入信

之香文院を於手興の爲香運

由作由作は給は依は修りてつるをといふ凡修は凡

一て世の障得かかづらぬといふ唱守はあのを状はあ

唱守所乃りたり手裏をたとのえりあ

若根奉蓋日被進瓶涌泉

文佛像經卷深嘆を不可有

子細書培供養每法義入禱

を相當大法念儀式欽言乃法

彼也言庭大乃道末以聖道

名宿可被逐其言儀乃疾師

法記呪其呪衣採題每員敬

死種者獨杖對揚必願師木

三ノ山書

百二

讀師



讀師



讀師



讀師



不徒加清也

▲音指ハコトニ夫法を修すの事
▲音指ハコトニ夫法を修すの事

▲音指ハコトニ夫法を修すの事
▲音指ハコトニ夫法を修すの事

▲音指ハコトニ夫法を修すの事
▲音指ハコトニ夫法を修すの事

▲音指ハコトニ夫法を修すの事
▲音指ハコトニ夫法を修すの事

▲音指ハコトニ夫法を修すの事
▲音指ハコトニ夫法を修すの事

▲音指ハコトニ夫法を修すの事
▲音指ハコトニ夫法を修すの事

▲音指ハコトニ夫法を修すの事
▲音指ハコトニ夫法を修すの事

▲音指ハコトニ夫法を修すの事
▲音指ハコトニ夫法を修すの事

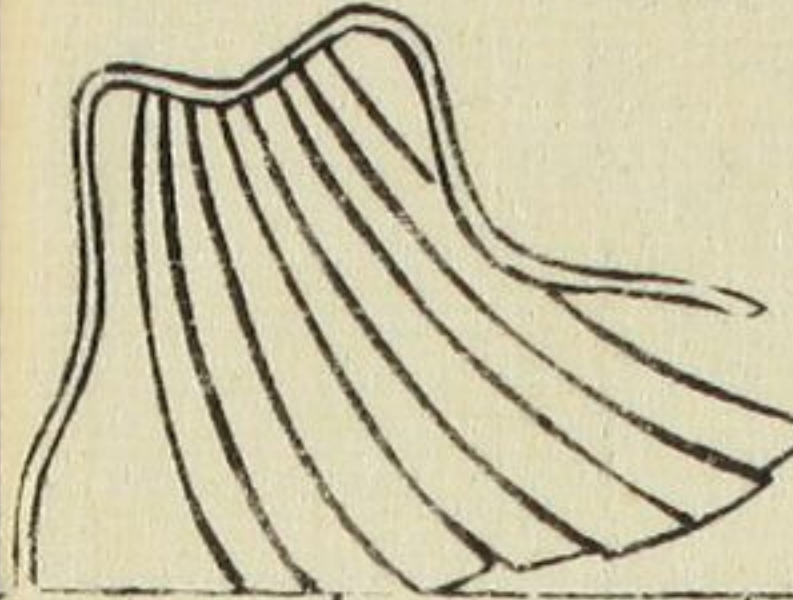
▲音指ハコトニ夫法を修すの事
▲音指ハコトニ夫法を修すの事

▲音指ハコトニ夫法を修すの事
▲音指ハコトニ夫法を修すの事

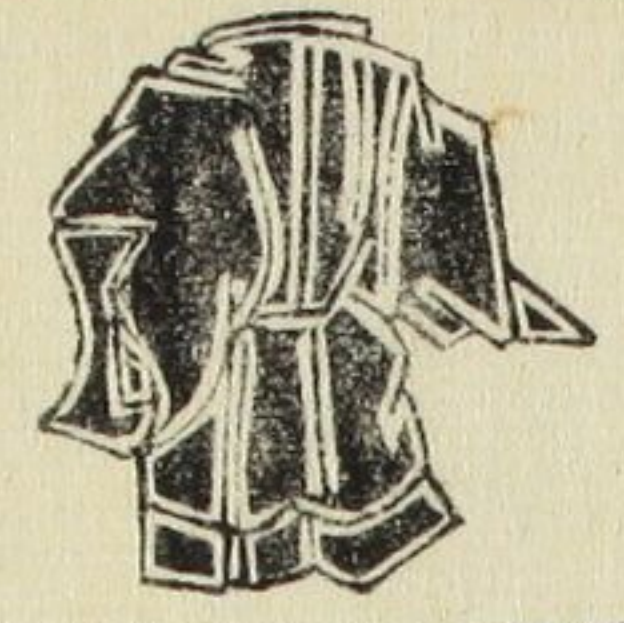
▲音指ハコトニ夫法を修すの事
▲音指ハコトニ夫法を修すの事

▲音指ハコトニ夫法を修すの事
▲音指ハコトニ夫法を修すの事

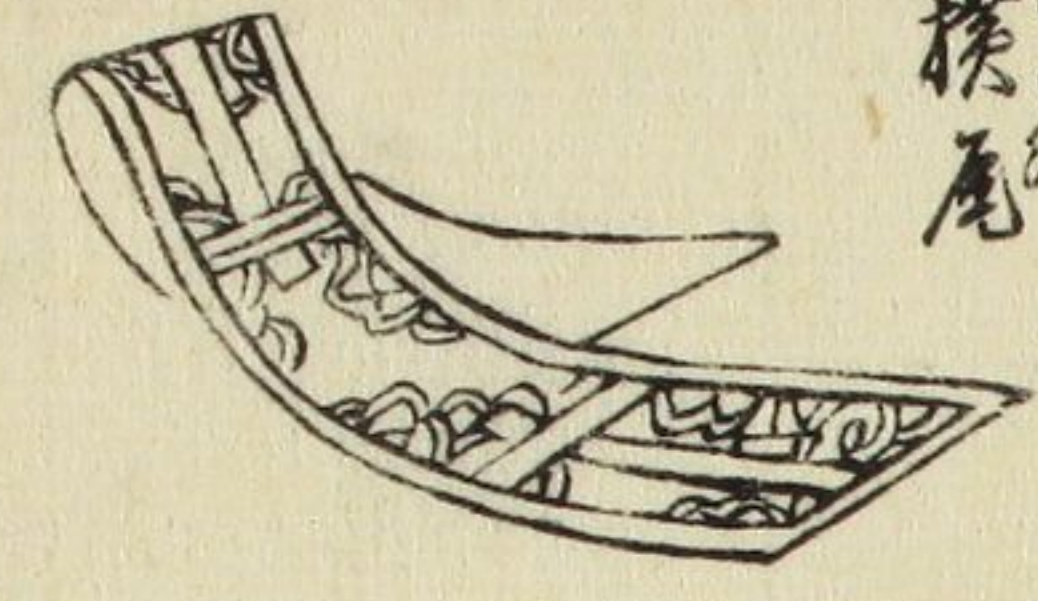
法衣の類



法衣



撲尾



法衣講釈

二百四

僧蓋瑞隆如云香煖香人息

蓋赤蓋白拂法螺檀香生瓦

手机臨時纏頭と左道之儀

也公用事と指蓋且云烟壺

也山事段為紙面有眼只得

沙衣下仕徳行毒細約足兼

之時以上と謹之

修入八月十三日の状
みりや ▲ 蘇葉の香も

の拂之を各事の由の事子田入りて務中とのを先教り

▲ 撲尾六月の返状みりや ▲ 拂尾の指の古抄みりや

若の纏せりやとぞ ▲ 撲尾の蓋の頂のと此纏ふ蓋成

志ききま上に布と志ききま上に布と ▲ 撲尾の六月の返状

みりや ▲ 天蓋ハカ持不用ある後摩檀之 ▲ 西堂ハ七月の返状

疾と系に申されたる物よそ似方の辨之 ▲ 西堂ハ七月の返状

みりや ▲ 白蓋ハ令別赤蓋ハ胎蓋也白赤の辨之を強

くると天蓋之 ▲ 白拂ハ白拂の尾よそ似りたる物也 ▲ 法衣ハ

撲尾之先と吹く一切法衣縁のこめとや ▲ 身ハ香也

法衣講釈

二百五



相着之君近日之儀中下次
 且為着經且為瓶經可之行
 大無山月之儀身以前之儀之

時分以
入院新令ハ一寺の住持よりあると此處儀の
 人新命と申す物と云ハるなりハ品儀

瓶經ハ弟の經ハ大無ハ大無の儀と稱す
ハ對面の儀ハ正法ハ拓き定まるハ看經ハ持經あり

九月のを
狀に見る 彈珠僧 瓶經寺 徳社 智

道元流 在精 一 奉 住 他 時 燕

公化法 僧 物 布 施 次 牙 堂 放

實 心 願 兼 之 仁 寺 行 者 衆 中

兼 用 之 仁 堂 之 存 知 經 委 細

下 身 法 也

彈珠僧堂乃於小日月のを快ふんぬ
 徳社 瓶經ハ社儀事との書とあり



東林院寺司庫司炭院烟葉

人者見初出納山守本寺門

寺火院振申也

塔院坊主中寺寮のうき

午戒を上げ初を打發して後の様なり

時僧院の初世の板とおつ役とも

又初世の教く又業院の保字

中病僧の世居する役人

煙の寺の初世の板とおつ役とも

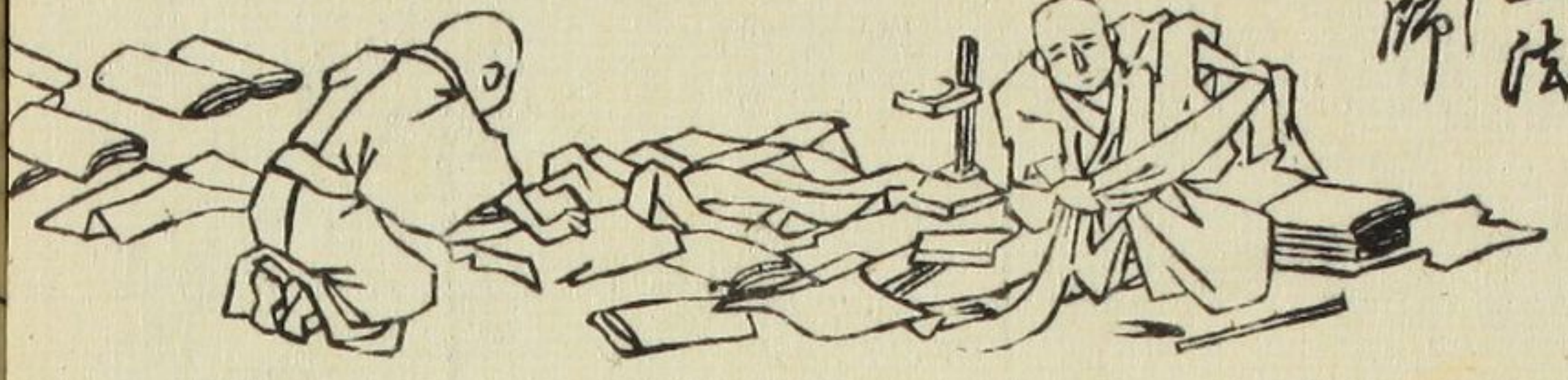
何ん人天下の初世

火の院の初世の板とおつ役とも

律僧と長老

庭川博尺

工法 師



代目



初奉典座沙弥八誡戒人工法

師也 一律の四月のを始ふを九月のを終ふ

殺生偷盜邪淫妄飲酒の戒子座の寝の之を誡

聖道志一寺檢校執行的當

長史學以在之院之執當之

在阿闍梨法橋律師法眼僧

於法中修心山園代大勅進

小別當得業肉供奉之講

達教者當為當於維那也

上座以下承任司

檢校 一律の四月のを始ふを九月のを終ふ

圓寺の住持の稱 一寺の長史又西の稱

新麵

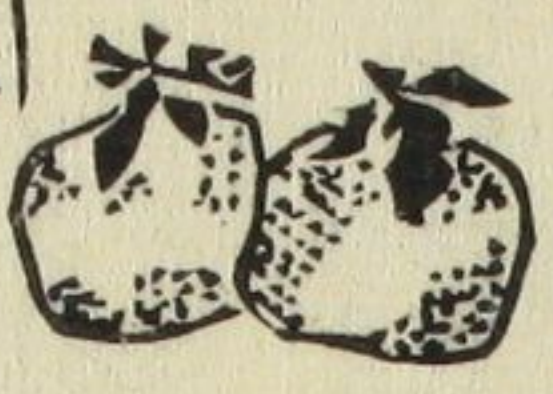


饅頭



温湯

柚



柑



橘



茄子



のついでと云ふは、
之次也と推云

▲又、
此の信學問の

本之掛塔云

文

意 意に之くお着ぬるを

さんま次に經信の

食の能物木の作法

人わらんよき

り邦に便る方

此中

十月三日

監守

進上 衣袴侍老

のこ

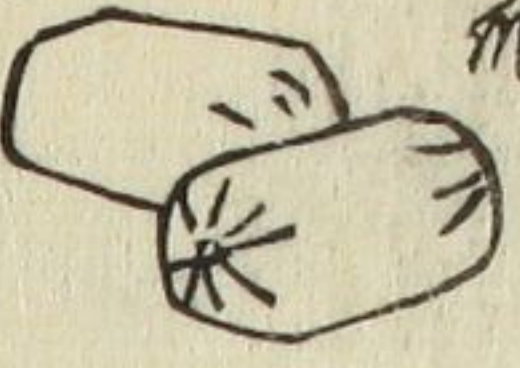
の

沙札

兵川再尺

二日

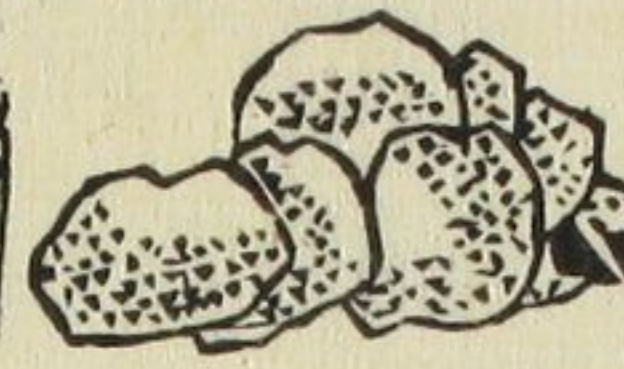
熱丸



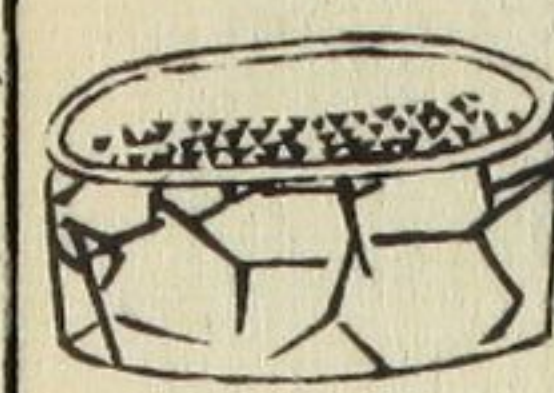
餅



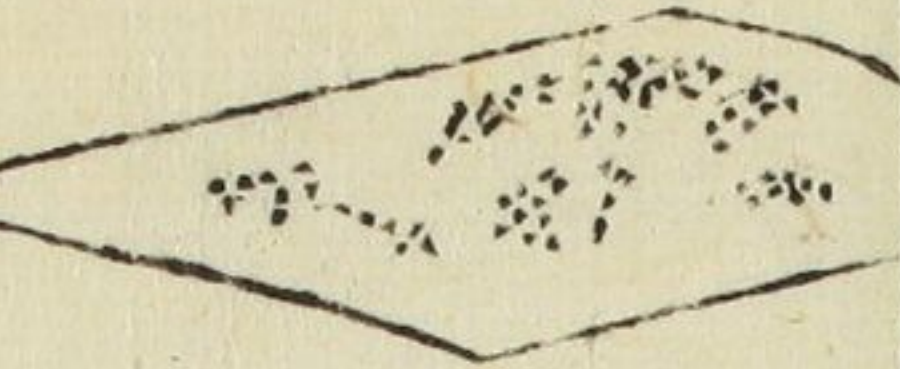
餅



糰子



楠



菜



伏ふ



中平の物調菜人未事不可

物粗任事之進

作布能物子被物祿物等

略之

方又為堂と後堂小袖

宛素冠素冠素冠之法紗

沙花番冠番黃番布二端

上品細灰未和事より素紗

柄花番襖帯紗と絹も綾木

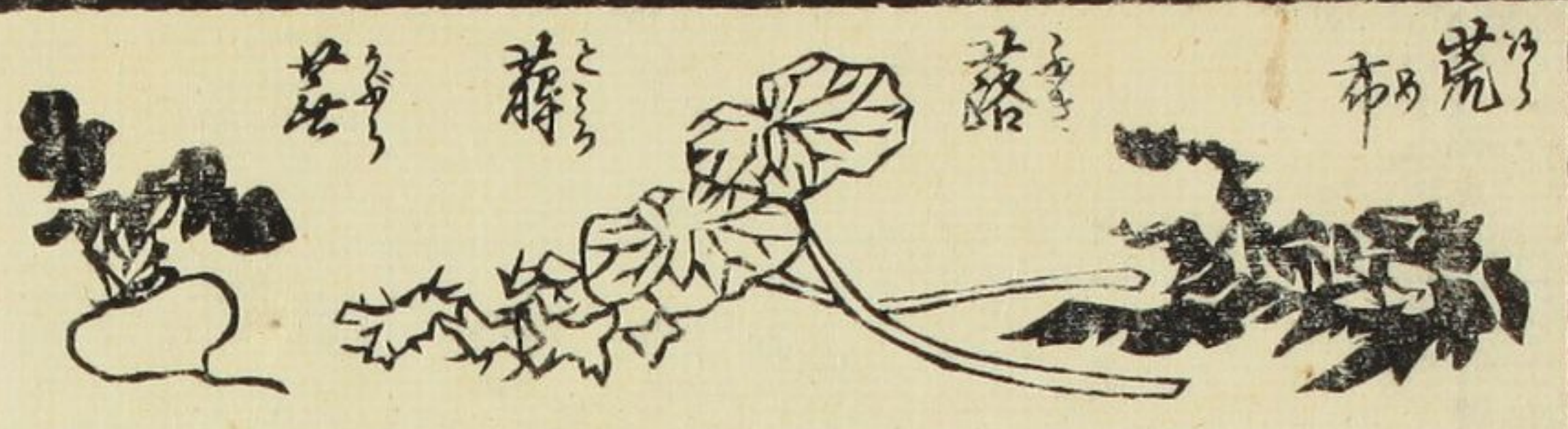
綿木各三配以首方と素紗衣

兼海老平江帯各一帖

又自物とて作おも老の箱あり

美川精尺

百一



瓜沃茄子出時系物也伏

兔曲蒸餅燒餅漆與米宗餅

精粉木乃浸料乃夜玉也

の肉と見ると一葉子、半字果ふく木の實也。▲桐餅ハ

牛名擦脂俗ふけスといふ樹皮を食ふ也。▲油煎ハ

子未考。▲伏老ハ一字條。▲西ハ半字條。▲

▲茶餅ハ俗ハ茶餅ハ一字條。▲精ハ俗ハ一字條。

▲茶餅ハ俗ハ茶餅ハ一字條。▲精ハ俗ハ一字條。

▲茶餅ハ俗ハ茶餅ハ一字條。▲精ハ俗ハ一字條。

▲茶餅ハ俗ハ茶餅ハ一字條。▲精ハ俗ハ一字條。

▲茶餅ハ俗ハ茶餅ハ一字條。▲精ハ俗ハ一字條。

▲茶餅ハ俗ハ茶餅ハ一字條。▲精ハ俗ハ一字條。

松茸



平茸



秋



生



歩

軒



熟

本草綱目

生房昆布 樽岩 烏頭 布 荒布

玉葉 桑葉 菊葉 葛葉 漢葉 葛葉 葛葉

子葉 柏葉 柏葉 柏葉 柏葉 柏葉 柏葉

清竹 豆葉 桑葉 桑葉 桑葉 桑葉 桑葉

苦和布 苦和布 苦和布 苦和布 苦和布 苦和布

甘苦 燻香 酒花 松茸 車草 石

藥水 隨新 行 之

て板汁の介 搗に具ふる 糸と子とて かくの 糸粒の 倍習く

▲織蓆 蓆の 丈根と 細く 切らるる ▲平房 平字 平葉と 糸

和名 キタキス又 ムマツキ との ▲昆布 多く 糸海 糸海 糸海

り 倍にお 良布 との ▲馬頭 布 糸考 或 洗糸 糸和 布 糸の

▲荒布 平字 海帯 と 糸昆布 に 似く 狭く 糸と 糸と

本草綱目

二百三

内の子を白く滑く膩くう毛と油を米こりの薦の字をそ
紫と云て席に織る名之 酢菜ハ軒中うのめあるべし

於元ハ和名ソバウリと云 表豆ハ表豆之 茶ハ苦茶之俗に
ケシナグサとのハ 首ハ心字葛首と云く 園豆ハ心字豌豆

く和名ソラマシとのハ 蘇ハ俗小之練糸とのハ 和布ハ心字
石蓴と云 表豆ハ心字葛首と云 柿ハ心字柿と云 柿葉

あり俗小穂依とのハ 正月蓮葉種之柿ハ心字柿とのハ
甘若ハ心字系菜と云 地若ハ心字地若 和若ハ心字和若

と云 赤松の皮下に生じ 半背ハ心字半背 苦棟樹
に生じ 乃葉ハ表方之稱之 今世有るは心字と云 表方

後以 後葉子と生葉摘葉率

材熟材干本花葉子枝權表

田為子後葉子百合系零漢

子陸法自老可用之 串材竹と葉

材之 熟材ハ心字熟する材之 葉ハ心字葉 角ハ心字角

ハ心字ハ心字ハ心字ハ心字ハ心字ハ心字ハ心字ハ心字ハ心字

後子ハ心字ハ心字ハ心字ハ心字ハ心字ハ心字ハ心字ハ心字
後子ハ心字ハ心字ハ心字ハ心字ハ心字ハ心字ハ心字ハ心字

後服病眩察



監守

▲監守衣衾ハ其不潔のを状ふ兄の▲桑甲素ハ其不潔と
 別ニ甲甲乙の義明列の以事之たとハ俗の二身以事之と
 つかぬ一是ハ其名を以て其料と
 ふえんとて假ふ初死せ一老あり

此間持病再發又ハ心氣後病

老若未交發者以爲療治者

活活如母活活者仁ハ救藥

肝中とるもの人來飲和氣丹液

典業者以難達ハ施業院寮

有之病仁名可任業達作也

▲再發ハ正治して又もひくるもの▲心氣ハ心づらひの積
 よりの發る病▲後病ハ積聚の數して後中のものなり也
 ▲老若未交發者ハ法儀傷つた病▲活活者ハ仁ハ活活の
 骨柄ある人天性の妙なり也▲教業師ハ其巫醫之下也
 ▲老若未交ハ和氣丹液ハ二家の民之在り友澤の者なり和
 氣ハ今の事并和氣丹液今の典業院寮小治原是なり典

莊川講記

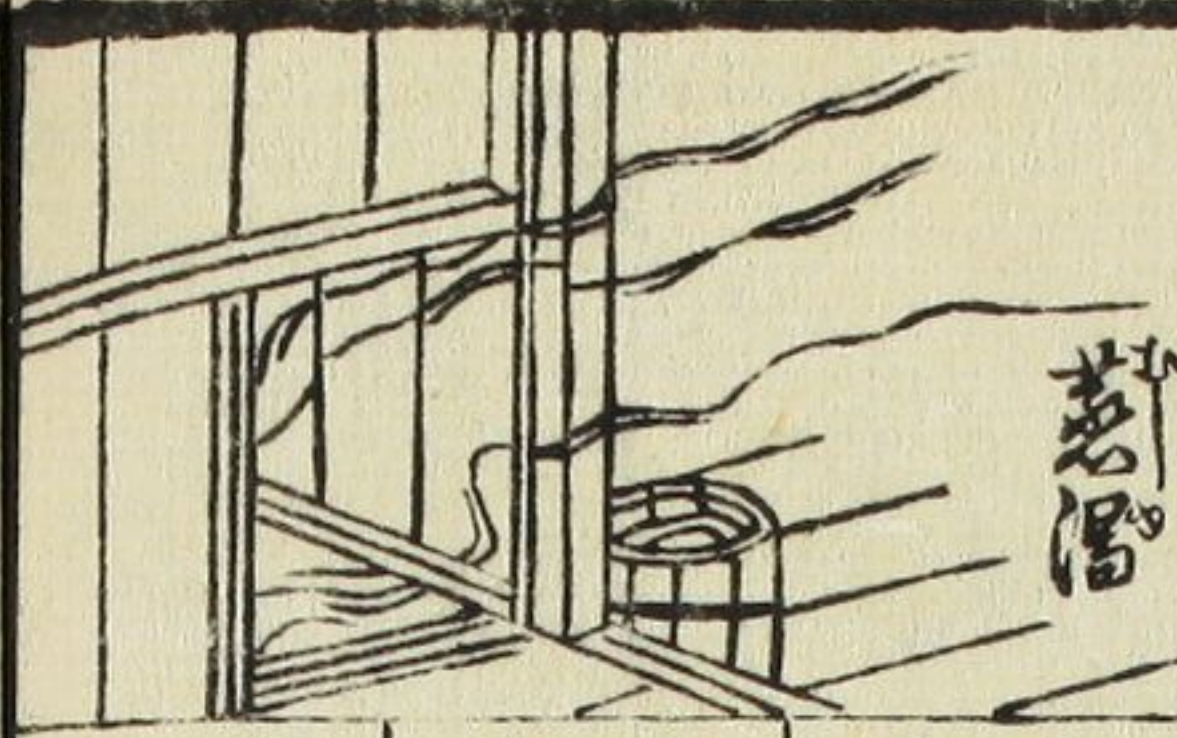
百三十三



温



蒸溜



針



名



及言言

二百五

僅云

▲持徒合業の解りて持て清く之を獲ひて
酒合業之持業教業の類あり一▲酒業病

の交りて之を担りて業▲補業の内之を以て之を補ひ
益は業▲本方古人の言ありて此れは他合世の業方あり

▲加減の病忘れしうて本方と定められ業味と或は加減
を減すとす一▲病の合世の衣▲持好物は六病なり

食物と禁物と好物とありて之を以て之を以て▲合世禁
日死の合世の衣と死しうて出付一▲發世の發世強はくも

付と云
意文
此は持好再發り一此又種々病の類あり
これ功ありて求むるも拙きなり

るやうなれと名を以て之を以て之を以て能業院の業方あり
らんふ業を以て之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て

らば只は此の如くは持好の類ありて之を以て之を以て之を以て
之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て

の持好未業教の類ありて之を以て之を以て之を以て之を以て
持好と稱して

中附せん

十一月十日

自税助素

僅上

至計頭教

▲至計頭は持好上にて持好は持好なり
援助は正位下にて持好は持好なり

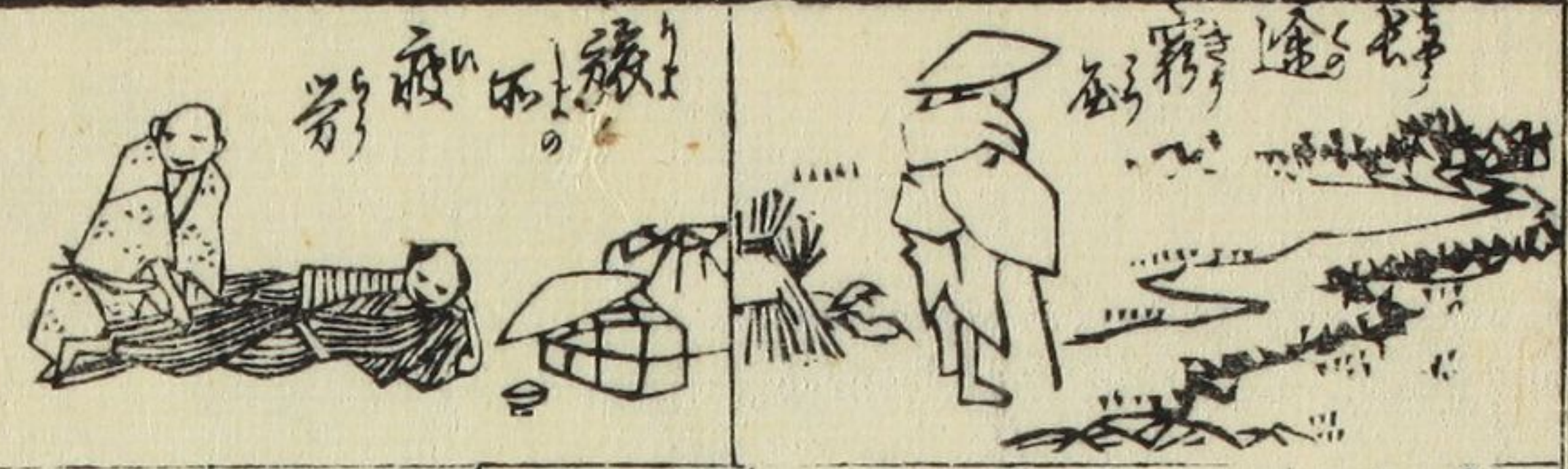
長川

二百一

被毒者生也心之謹也

▲廣内、心之謹也
男女の交合成

酒酒能行酒酒之毒酒といふあれと交まれば酒
 の毒も毒もせり酒▲瞋眠は昏沈は狂なり也丁て毒も
 つりともるといふ▲仍依其動心月の毒もあまひと何
 らすもく▲食物能毒は死をも大食すく▲西化幸芳ハ
 毒酒他の方にもして毒く心毒と毒芳はといふ▲毒菓草
 若く人々毒も毒のつく毒記といふ▲毒菓草は方々に毒
 ぬる毒も毒もあつて此の毒もく▲諸病毒毒は毒毒も毒七
 方の毒もく▲困居様毒は果も毒も毒も毒も毒も毒も
 毒毒すといふ▲毒類毒毒は毒く毒類は洗て毒も
 と毒もといふ▲關毛毒毒は毒も毒も毒も毒も毒も毒も



續の毒の

つり飲もといふ▲流味熱湯は毒く毒も毒も毒も毒も毒も
 毒くといふ▲毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も
 ▲毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も
 毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も



源文の

毒の毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も
 毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も
 毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も
 毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も毒も



源文の

十月日

多行既

進上 主秋助殿

少但國之故為老押移在系

手而和之君必長程日之

眼近防之涉之落之委不預

喜作一條若其委在甲世隔

心之玉階探在法及推在法

氣色如河

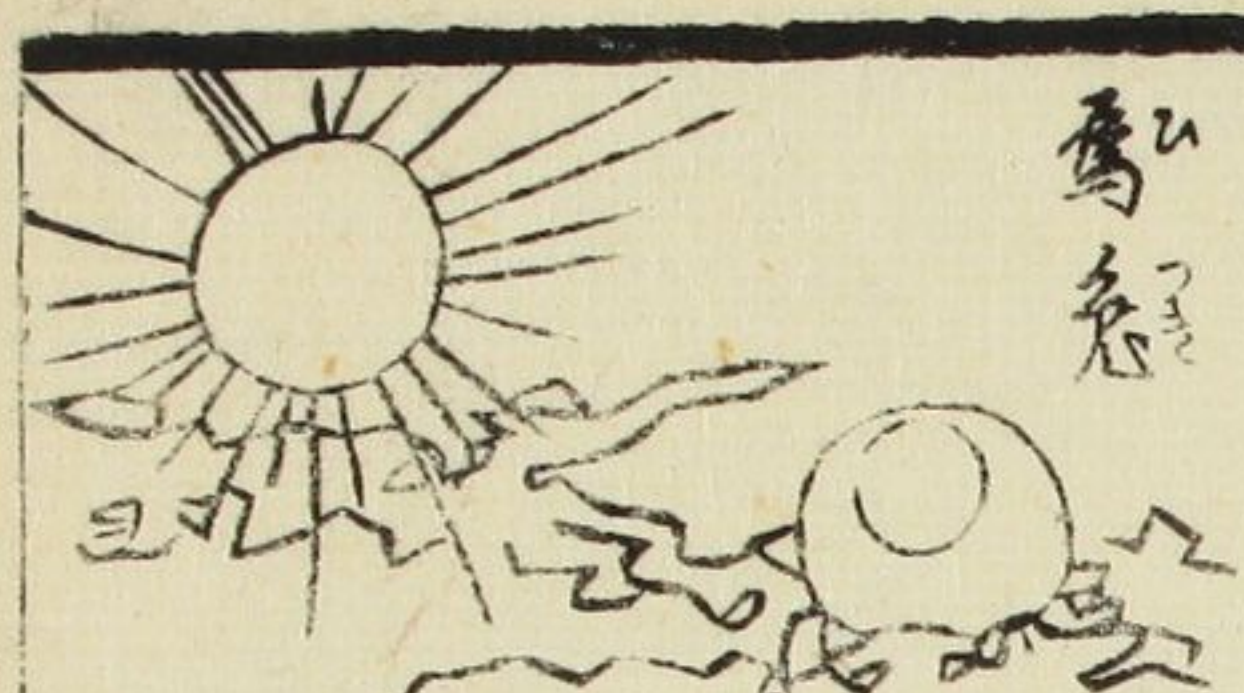
とを陽と令當とのひを法と玉老とのふより時後の月

日のとふ能利ひとと之眼近ハむびちとくと行とと玉

て就きととの上落ハ程果て法之成りよとと之委其ハ

向い申せしと之委其也 其の國を産旅

清尺

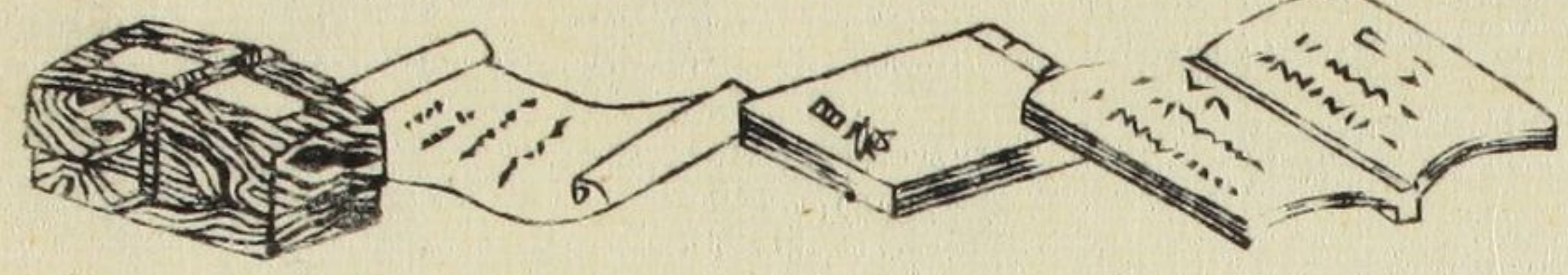


田の訓定



目録

目録



小始て阿保親之の法子仲平初平並人王
業平也平あやうた中もろく一姓あり也

清身教國瑞毛二甚也

以去珠北冬物名親射之作

遠志を二國報依親在吉信也

思純光陰美根深重也何時

射之即下世業肉之重路次

疲勞長途病在兵北純也外在

他依慈同而被驚也

任小起さくろのそろろふを起之純光陰八月のそろろ

入院是任之儀式名有使

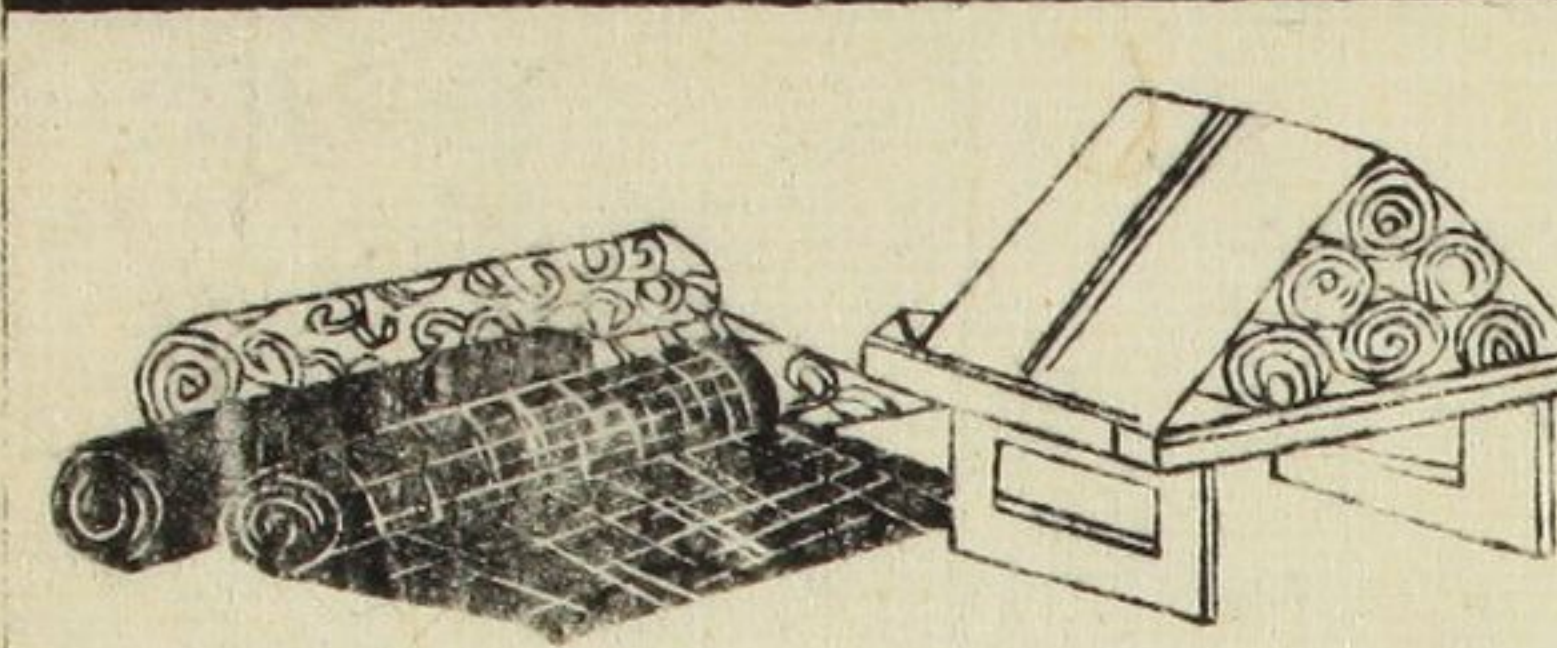
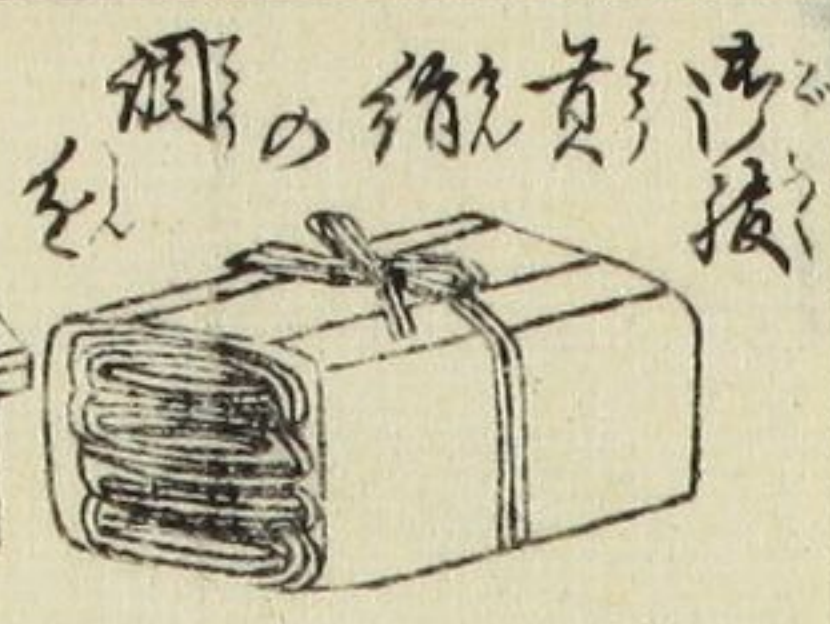
勢之法儀是母子細在麻人

本日並出仕恒例也仍等案



梳篦整物様物以下是時節
 京物雜子厨調柱之災物廳
 庭經美尚古所結構也城市

▲八幡、但玉の堀より入る ▲是任若府はたふあのを決よ
 日也 ▲吏勢、役人の改とたさそく勢く之 ▲法儀を
 法度儀例之 ▲庭人、あのを決よる也 ▲日並出仕ハ
 役人毎日出勤守り之也 日並、日次不修く可るん 恒例
 ハ改りの恒中定めとす 例之 ▲事乃、全に事て下に例
 ▲梳篦、之月のを決よる也 ▲整物様物、たふあを意の品



あり ▲頼の厨、空身料理のみに出仕者あると、同く産
 正方あるべし ▲庭庭、役所之 ▲當古、其例、公の若の長屋
 ありとあややろん ▲城市 四考、乃、事夫

分収、雨、田記、文書、公文、田所
 結存、勘定、書、生判、官、代、勘、文
 度、勘、勘、司、様、古、日記、目録、主
 家、小、目、代、信、信、也、文、下、回、郷



法收納徵納之海期規物也

代之債來納也下準按年為

有損按田不執損亡之動也

每用數矣却合動也

煩▲本按實積個をいふ者より積と事なり▲準按年布

てハ重きを以て租敷租米多負の累敷ありハ納不率法ハ

租稅殺不の法度之▲收納の意ハ納しる者負之▲徵納ハ

後不ハされ償還ありを納しる者負之▲海期の意ハ海

の期限之▲規物も代ハ債の米をの旨ゆらハ報納米の取又

と準按年之意ハ今年に納むハ其年二意分の意ハ

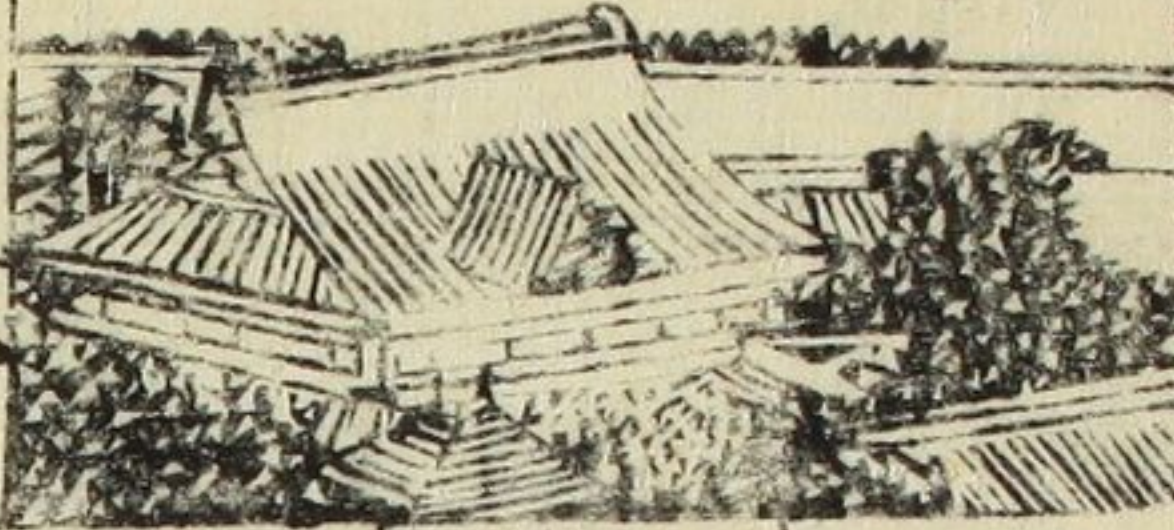
加之諸有法往神禱之奉

幣ち入堂券之法令連傳

事也之例也

新田

百三十五



辰言詳新

其言其成之勢民而納法之利

固言其成也衆難治之鄉保其

實之現利民多也其多之但難

定言其遠私心奉順之難是

紙面傳約後日忘之海之

す之▲新編中八帯市を奉守す▲入世は必之▲法を
信より九月のを伏不見の▲秋民は日月のを伏不見の▲納法は



三月のを伏不見の▲其天の慶大なる後▲納法はるやと云
ふと刑す後より治めりて其の意と以▲其貴は三月乃返

状不之由▲郷に重保の村とあり▲現利は夫なる利法とあり
▲臣多の心を安んずる▲難治は其意とあり▲其意は保其

る意
文
其意は保其
保其意は保其

保其意は保其
保其意は保其

保其意は保其
保其意は保其

保其意は保其
保其意は保其

新編

百三十一

東都書肆

作者

溪齋善次郎

画工

同

弘化二乙巳十二月

日本橋通三丁目

龜屋文次郎

嘉永六癸丑年再版

本銀町河岸

山城屋新兵衛

東都書肆

新葦屋町

龜屋文藏

東都發行書林

本石町十軒店

英大助

日本橋通一丁目

須原屋茂兵衛

同 二丁目

山城屋佐兵衛

芝神明前

和泉屋市兵衛

同

岡田屋嘉七

馬喰町二丁目

山口藤兵衛

通油町

藤岡屋慶次郎

日本橋四日市

山城屋政吉

浅草福井町

山崎屋清七

兩國橋吉川町

山田佐助

日本橋通三丁目

龜屋文次郎

